



2014年02月13日 (木)

胚培養士育成施設を運用開始 2014年2月6日(木)放送



不妊治療を受ける人が増える中、岡山大学は、体外受精を行う胚培養士と呼ばれる技術者を専門的に育成する全国で初めての施設の運用を6日から本格的に開始します。

胚培養士は、不妊治療の際に医師の指示を受けて体外受精などを行う技術者で、現在は、2つの学会で独自の認定制度を設け、全国で1000人あまりいるとみられます。

体外受精で生まれる子どもは3年前に初めて3万人を超え、胚培養士の役割も高まっていますが、現在は農学系で動物の生殖医療を学んだ人や、医学系でも臨床検査を学んだ人が多く、現場からは人の生殖医療を学べる専門的な育成施設を求める声が出ています。

このため岡山大学は、岡山市北区の学内に現場で働く胚培養士や、胚培養士を目指す学生を専門的に育成する施設、「生殖補助医療技術教育研究センター」を設置し6日午後から運用を本格的に開始します。センターは、学部と医学部などが連携して運用され、それぞれの学部の教授などが動物の卵子などを使った実習や遺伝や生命倫理の講義などを行い胚培養士として必要な技術や知識を学ぶことができます。



岡山大学によりますと胚培養士の専門的に育成する施設が開設されるのは全国で初めてだということです。

生殖補助医療技術教育研究センターは、「高い技術力を持った胚培養士を育て、不妊治療の成功率を高めたい」と話しています。

【三條アナウンサー】

ここからは取材にあたっては氏家記者とお伝えします。氏家さん、胚培養士ということば耳慣れませんが具体的にどんな仕事なんでしょうか。

【氏家記者】

胚培養士は、医師の指示を受けて体外受精を行う人です。胚培養士は、女性から取り出した卵子と男性の精子を人工的に受精させます。そして、子宮に戻せる状態まで育てるのが仕事です。

この胚培養士は、元々、医師が行っていた体外受精などの技術的な分野を受け持ちます。2つの学会が10年余り前から認定している技術者で、現在、全国で1000人あまりいるとみられています。



【氏家記者】

そして、これほど胚培養士が必要とされている背景がこちらです。

国内で体外受精で生まれる子どもは右肩上がりが増え続け、3年前、平成23年には3万2千人あまりと3万人を超えました。ここ数年、1年間に生まれる子どもの数は100万人あまりで、およそ32人に1人が体外受精で産まれた計算になります。

【氏家記者】

どうしても子どもがほしいと不妊治療を行う人が増えていまして、そうした中で胚培養士の役割は高まっているといえます。ただこれまでは専門的に学ぶ施設はありませんでした。ある胚培養士の思いを取材しました。

(VTR)

胚培養士の小見山純一さん(34)。不妊治療を行っている岡山市南区の医院で、3年前から働いています。



この日行ったのは精子を直接卵子に注入する顕微授精です。動き回る全長0.06ミリの精子をガラス針で吸い取ります。それを直径0.1ミリの卵子に刺して中に注入します。

卵子を傷つけないように注入するには高い技術が必要です。



【小見山純一さん】

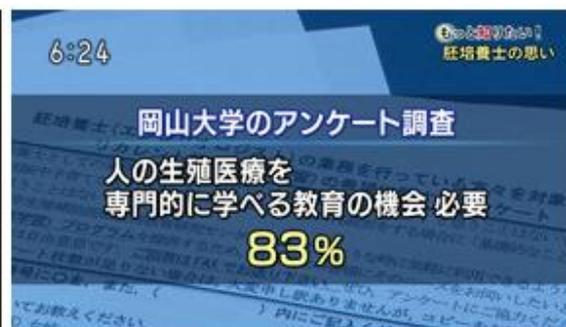
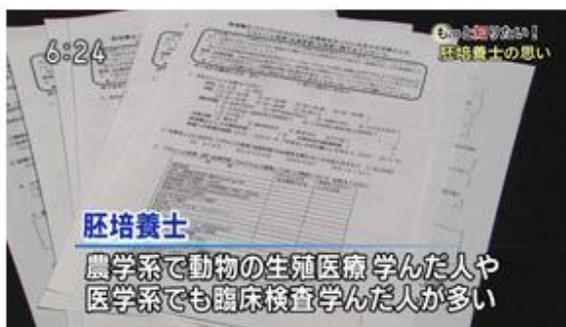
「不妊治療をやっていて、いちばん技術の差が出るのはこの顕微授精の操作になると思います」

小見山さんの学生時代の専門は遺伝子の解析です。ただし、扱っていたのは牛やねずみといった動物でした。大学院を修了した後、会社勤めをしていましたが、知り合いの紹介でこの医院で働き始めました。

仕事は一とおりでできるようになった小見山さん。しかし専門的に学んでいないヒトの命を扱う仕事に重圧を感じているといいます。

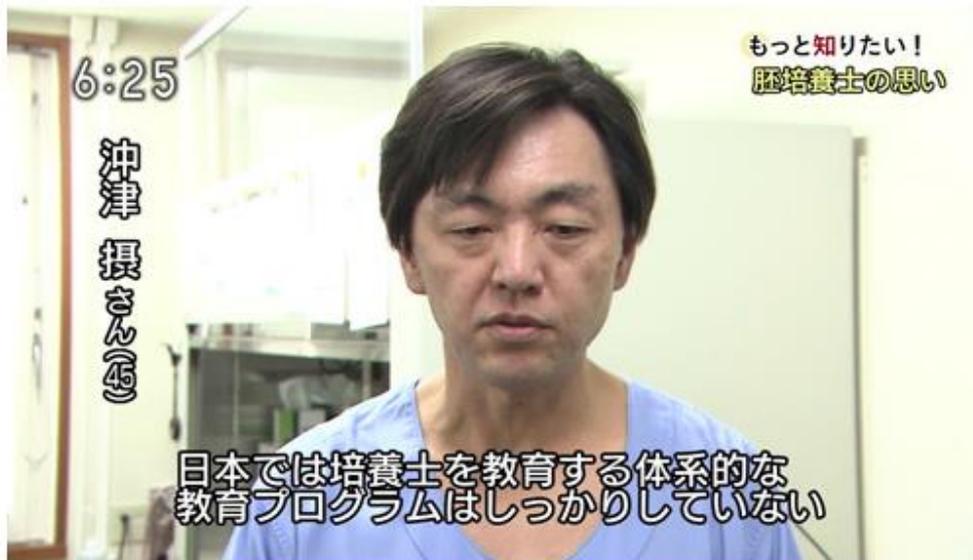
【小見山さん】

「大学の時なんかはマウスであったり、正直な話、万が一失敗してもまた次頑張ればいいやというふうな、いらいら代えがきくような、融通の利く環境だったんですけど、今はほんと一発勝負で絶対に失敗ができない、という緊張感がものすごくあります」



重圧を感じている胚培養士は小見山さんだけではありません。胚培養士は、農学系で動物の生殖医療を学んだ人や、医学系でも臨床検査を学んだ人が多く、岡山大学が行ったアンケート調査では、胚培養士の83%が人の生殖医療を学べる専門的な教育を受ける必要性を感じていることがわかっています。

小見山さんなど、これまで10人以上の胚培養士を指導してきた沖津摂さん(45)です。沖津さんは、今は不妊治療の現場で働きながら技術や知識を深めて行くには限界があると指摘しています。



【沖津撰さん】

「日本では胚培養士を教育する体系的な教育プログラムはしっかりしていないんです。非常に未熟な状態に現場で働き始めるという状況で、すると職場での教育に非常に時間がかかるんですね」

こうした課題を解決しようと運用を始めた岡山大学の「生殖補助医療技術教育研究センター」。小見山さんもここで胚培養士としての実力を高めたいと考えています。

【小見山さん】

「われわれのような現場において仕事をしている人間でももっと知識や技術を吸収しないといけないと思う。あの先生良い先生だよってもらえるような培養士になりたいなと思います」

## (VTRおわり)

【三條アナウンサー】

命を扱う現場で働く胚培養士も専門的に学びたいと考えていて、岡山大学のセンターに期待しているんですね。

【氏家記者】

岡山大学は、このセンターで、胚培養士を目指す学生を対象とした講義を行います。また来年度からは現場で働く胚培養士も対象になります。そして、不妊治療の分野でトップクラスの医師や技術者を招いて実演を含めたセミナーなどを行うことにしています。そして将来、胚培養士が国家資格になったときにも対応できる育成モデルを作りたいとしています。

【三條アナウンサー】

国も胚培養士について何か検討しているんですか？

【氏家記者】

厚生労働省は、不妊治療を行う医療機関について来年度から胚培養士などの技術者を配置するよう義務付けることにしています。

不妊治療には多くのお金や時間がかかり、患者は子どもが欲しいという切実な思いで治療を受けています。こういった動きが不妊治療の成功率アップにつながればと思います。